平成27年度MieMuの活動と運営の評価結果概要

外部評価結果

- 企画展での幅広いテーマ設定と年間開催件数の増加で、幅広い年齢層を獲得し、館全体としても多くの新規来館者（60%）を得たことは評価できる。
- リピーターについては、一定程度（40%）は確保できているが、現状割合の維持や来館回数の拡大には、陳腐化を感じさせない、基本展示の計画的な更新や解説機会の充実、学校を対象としたプログラムの開発等が急がれる。
- 来館者の満足度について、事業ごとに度合いは異なるものの、総じて満足が得られる（展示に関しては85%以上の）活動を展開できている。
- 広報活動に関しては、東京でのプロモーションやSNSの活用など、新たな手法を積極的に取り入れて事業が展開できたことは評価できる。
- 展示環境や資料の保全・保護については、館の資料はもとより、公立機関として全県的な活動（支援）ができたことは評価できる。
- 県民や利用者との連携について、企業とは、利用者だけでなく活動資金の確保でも、他の公立館にはない、すぐれた実績を残している。反面、「みりょく発信隊」や「みんなでつくる博物館会議」など、個人との連携推進については低調で、現行の組織や活動のあり方について、再考を要する。
- 地元と連携した総合研究については、複数年に亘って成果があがっておらず、目標や計画の見直しが必要と言わざるをえない。

（総括）

評価結果から、当館には、公立博物館として他都市の施設と比べ、優れた点や先進的な取り組みがある中で、改善すべき事項も少なくない。この評価が前年度と似た結果となったことは、優れた点とともに改善すべき点も「継承」したこと、即ちPDCAサイクルの最後が有効に機能していないことを示している。

しかし、限られた人員・予算の中で優れた点は継承し、同時に改善も実現することは容易ではない。そこで、戦略目標にある「評価制度を活用して事業を選択」＝「経営資源の効果的配分」が必要となる。企画展の本数過多や、地域での調査が引き続き低調であることは、目標（値）を見直す必要があることを示している。

今後、本評価制度が有効に機能し、改めて適正な目標を定めるとともに、館長の指揮の下、職員全員が常にその達成状況を確認・共有し、不断の改善に努められることで、館の機能が向上し、利用者サービスが充実することを期待したい。